

第9回 公式訪問報告



第9回 総会&現地報告会

【東京】10月8日(月・祝):武蔵野芸能劇場

【大阪】10月13日(土):高槻現代劇場文化ホール展示室

詳細につきましては、別途あらためてご案内いたします。
皆さまのご参加、お待ちしております。

コンテナの教室。真剣な表情で授業を聞く2年生のナスミア。

会員の皆様、お元気でお過ごしでしょうか。今年
の訪問団(長倉、森、水間の3名)は4月8日に
日本を出発、5日間のポータラnde滞在を終え、首
都に戻る途中、タリバンの首都中心部での攻撃
を知りました。翌朝にはほぼ戦闘が終息し、4月
18日に予定通り帰国できました。

山の学校では、新学期が始まったばかりの子ど
もたちの授業を見、長縄跳びやフラフープ、パン
食い競走等を一緒に楽しむなど交流を図ること
もできました。今年の1年生は20人。4歳から5
歳のオプザーバー4人も一緒に、1年担任のホラ
ム先生の指導のもと、みな元気に勉強していまし
た。山の学校を卒業して下のバザラックの高校に
通う子たちは13名、山道を往復4時間もかけて通
学する姿を見て、何とかできないかと思うことし
きりでした。

今回の滞在でいちばん驚いたのは多くの家の
屋根に円形のパラボラアンテナがあったこと
です。なかには洗濯機や掃除機を持っている家庭も
ありました。電気が通り、電化製品の購入、生活面
での復興が進んでいると実感する光景でした。

目にした「平和の光景」も心に残っています。肥
沃なシャモリー平原にはブドウが葉をつけ、その
手入れに人々は忙しそうでした。あちこちに野生
のチューリップが群生し、美しい花を咲かせても
いました。道端では、そのチューリップを摘んだ
子どもたちが、花束を道行く人々に売ろうと必死
でした。この取り合わせが、現在のアフガニスタ
ンを象徴していると思います。

「貧しさ」や「戦い」に目をやるだけでなく、それ
らの光景の中に在る「平和」に目を向け、それを大
きく育てていきたい。そのために会の活動が少し
でも役立てることを心より願っています。

長倉洋子

第9回アフガニスタン公式訪問

4月8日から18日まで、恒例のアフガニスタン訪問を行いました。長倉代表と森、そして初参加メンバーの水間が山の学校を訪れ、子どもたちとの交流をしました。以下、長倉代表のレポートです。

4月8日(日) 運営委員の森、水間と成田を発つ。ニューデリーで、インドに来ていた安井浩美さんと合流、翌9日、カブールへ向かう。

10日(火) 安井さんの家で持参したエコバッグ、三色ボールペン、携帯用ソーラーライトなどをセツト話めにする。交流会用のジューズやミカン、お菓子も買い求め、マスードとサーズフィンの花も用意(残念ながら今回はサフダルの墓には行くことはできなかった)。

11日(水) 早朝6時に出発。安井さんの友人で、国連職員に加藤さんも一緒だ。英語の授業をやってくれるという。

途中のチャリカールで仕事を待つ大勢の男性を見る。日雇いは一日800アフガニー(1アフガニー約1・6円)が相場という。パンシール溪谷に入り、朝食を簡単に済まし、マスード廟で

献花をして、10時45分、学校に着。途中は杏の花が満開だったが、山の上はあと一週間とのこと。

さつそく交流会を始める。プレゼントも配る。そのあとは安井さん提案のパン食い競走を実施。パンを吊るしたのが電線で食べにくそうだったが、足を縛った二人三脚は大いに受けた。

シャーミルザ校長と新しく入った3人の先生の処遇について話す。2人の女性教師が辞めたので、後任に2人を雇ったが、さらに政府から先生が1人派遣されてきたのだ。9学年に先生11人は多い。2人でと調整をお願いする。

シユグフア先生の家で昼食をご馳走になったあと、車で山上の集落ガーウィンへ。道の両脇は高い雪の壁。今年は大雪で雪崩もあったという。サフダルの家に荷を置き、村を見て回る。モモ・アリ(カティープの父)の家では掃除機を見つけて驚く。2年前には洗濯機を見たが、今年はずレ

ジもある。5000アフガニーで衛星用のパラボラアンテナを買おうと10局ものテレビ放送が見られるという。

12日(木) 子どもたちと山道を下って学校へ。1年生たちのザック姿はカバンが歩いているよう。空を見上げると雪山の上に月が。

コンテナ教室の1年生のクラスをのぞく。緊張している子、楽しそうな子、まだポカンとしている子。そんな子をベテランのホラム先生がやさしく、噛み砕くように教えている。爪の検査もあった。

高校生の送迎について、教師兼運転手のヤシンと話し合いを持つ。通学に時間がかかるため高校を中退した女の子がいるからだ。しかし、バスを見つけないのが難しい。会の車で生徒たちの送迎を行えないかという案が出た。

体育の時間、水間が持参した

長縄跳びをみんなでする。しかし、フラフープは実演が悪く、まいち面白さが伝わらず残念。

昼は校長シャーミルザの家でご馳走になり、そのあとゼケルラーやナルゲスがいるペパールの集落を訪問。一家の父親はカブールに出稼ぎにいつているが、たくさんの親類が来ていてにぎやかだった。

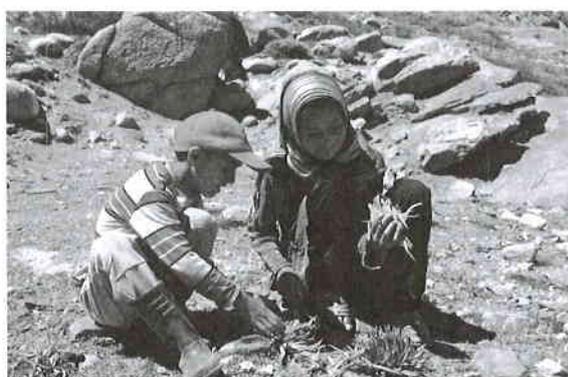
夕方、アミンの家をのぞく。マジヤミンが私からもらった写真窓辺に並べて見入っている。

夜、サフダルの長男サタールと話をする。4年で中退、町の自動車修理工場で見習工をしているが、父親が死んで村に戻って来ることがない。土地もなく、畑もなく、家畜もない。やってみたいと話していたJICAの養蜂プロジェクトもその後、進んでいない。

安井さんと相談、一家に牛を買うことにした。育ち盛りの子が6人もいるのに、ヨーグルトもチーズも作れないからだ。牛は1頭、約800ドル。サフダル基金から買うことにした。

13日(金) 学校が休みなので、森、水間と川の上流に出かけ

る。山菜採りのソーマ(5年)とシヤエスタ(6年)も一緒だ。水辺や岩の下などに、紫や黄色など色とりどりの高山植物が咲いている。マスードが愛した光景だ。子どもたちはシャリーという山菜をナイフで切り取っている。



山菜を採るシヤエスタとラシッド

夕方から、森、水間が泊めてもらうナイマの家で子どもたちとカードゲームで「神経衰弱」。子どもたちがすっかりはまってしまい、ラシッド(2年)は鼻歌まじりだ。夕食にはさつそく屋間の山菜シャリーが。大きい葉なので肉厚ないい味がする。美味しそうに食べる2人の様子を見て「ご馳走がない」と心配そうだったナイマも安心したようだ。夜はモモ・アリの家で楽器演奏を楽しむ。



演奏を披露してくれたカティープ

カティープが油缶を利用して作った弦楽器を弾き、父はタブラを叩く。

14日(土) 通学途中、子ども

たちは雪溪の雪を掴んで食っている。1年生5人が手をつなぎながら山道を下る様子がフォトジエニツクだ。シャボナとファトナ(共にサフダルの遺児)は教科書を読みながら歩いている。家では炊事や弟たちの世話でゆっくり勉強する時間がないのだ。それでも、ファトナはクラスで一番、シャボナは一番(弟パーセットが一番)だから感心する。



勉強しながら登校するファトナとシャボナ(左)

恒例の学業優秀者への顕彰。今年が一番から四番まで日本から持参した賞品を配ることができ。一番は保温水筒、二番にはザック、色鉛筆。生徒に渡したあと、景気づけにと日本のクラッカーを鳴らすのが、音だけで期待していた紙テープが飛び出さずガツカリ。百円ショップで買ったのが失敗。

学校が終わって再びガーウィンへ。いまは農閑期のため子どもたちは畑でサッカーを始めた。サッカーボールは表面がもうボロボロだった。

夜、絵描きになりたいと話していたファトナに「描いた絵があるなら見せて」と言うとうれし

そうにノート3冊を持ってきた。太陽が昇った大地で農作業する農民、鳥、動物、結婚式…。横から妹のシャボナが「何も見ないで書いたんだよ」と言う。

15日(日)

今日はカブールに戻る日だ。子どもたちと登校の途中、オートバイに二人乗りした若者を見る。どちらも戦闘服姿でドキッとす。笑顔を向ける

2人をよく見ると山の学校の卒業生で、1人はソマイエのお兄さんだ。タリバンと多国籍軍との激しい戦闘が続いているヘルマンド県で警官をしていて、いま帰省中だという。給与は400ドル、山の学校の先生の4倍近い。仕事があるなか見つかからない現実があるのだろうか、卒業生が戦闘をしていると思うとつらくなる。

11時になると、1年生、2年生は授業が終わって山路を帰っていく。みんな、いつまでも手を振ってくれる。2年担任のカリマ先生の「どの子もオマールが毎年やってくるのを心から楽しみにしています」という言葉を思い出し、手を振る姿に感傷的になる。

ポーランドはもうすぐ杏の花でいっぱいになるに違いない。名残惜しいが、そのポーランドをあ

とにカブールに向かう。河辺にピクニック用のスペースが作られているのを見つけた。夏には家族でくつろぎ、川の水で冷やした果物を楽しむのだ。渓谷の出口に位置するオストナの河原には大きなスタジアムが建設中だった。人々はサッカー大会が行われるのを心待ちにしているはずだ。大歓声がこだまする日想像する。

パンシールののどかな光景を見ながら、マジヤミンやナスミアは「人を助ける医者になりたい」と話していたことを思い出す。夢が叶う日を思い描く。パンシールの溪谷を抜けるとゴルバールの市場に出た。たくさんのお店が並び、一軒の店先には色とりどりのディスプレイ(シヨール)が並び、

金物屋の店頭には手作りの鍋ややかんがところ狭しと並んでいる。ペブシやスプライトがひもで吊るされている店もある。店の奥には気持ち良さそうに眠っている主人の姿。私が学生時代に訪れた時も、マスードと生活していた時もそうだった。古から続いていた光景だ。

カブールに連なるシャモリー平原では農民たちがブドウの手入れにいそしんでいる。畑のあちこちに群生している野生のチュウリップが美しい。

そこに運転手アクバルの電話が鳴った。トルコに行っている安井さんからのようだ。「首都で戦闘が行われているので外出しないように」という連絡だった。首都のホテルにたてこもったタリバンがあちこちにロケット弾を打ち込んでいるという。

「どうしていま戦闘なのか…。」平和が遠のいたという落胆と人々の思いに反した行動が長続きするはずがないという思いが交錯する。

翌16日

戦闘が終息したカブールを出発して、私たちは日本への帰路に着いた。



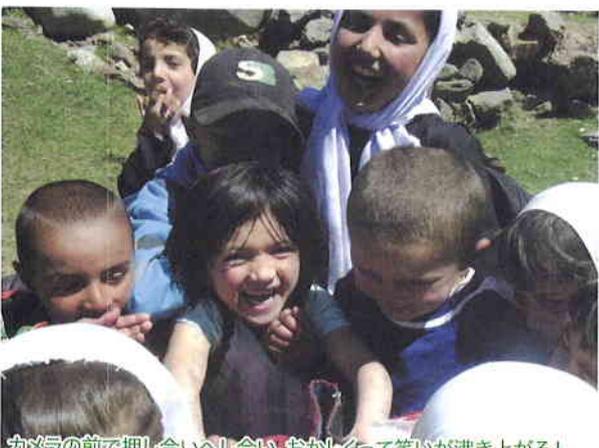
手を振ってくれる1年生



現地訪問初参加、運営委員水間真紀の旅の記録。「ヌーリア」はヤシン先生がつけてくれたアフガニスタンの名前、LightやBrightという意味です。

◎パンシールの風・空気・光

私のアフガニスタンに着いての第一印象は『ほこりっぽい』だった。でも、それはパンシール県に入った時、川の上を沿うように力強くそよぐさわやかな風に一気に吹き消された。「はい、いよいよパンシールに入りました」という長倉代表の声とほぼ同時にいままでほこりを避けるためにびっちり閉められていた車の窓を全開にし、思わず深呼吸。パンシールの空気を感じる。車も飛ばしているし穏やかな風ではない。でも胸いっぱい広がる空気においてはカプールやここまで走ってきた場所とは明らかに違う。風が空気が心にしみわたる。草や木々の若葉のにおいを含んだ、本当にピュアな(澄んだ)、心洗われるあの感じ。忘れられない。



カプールの前で押し合いへし合い、おかしくって笑いが湧き上がる!

さらにバザラックに向かって走り続けると、次々にどことなく見覚えのあるような景色が視界に飛び込んでくる。そうだ、長倉代表の写真で見ていたのだ。太陽の光は澄んだ空気を通し地上を照らし、緑の木々や草たちはより生き生きと川面はキラキラと輝いてみえた。

◎本当にかわいらしい校舎

「学校が見えてきたよ」高地で空気が薄いせいか、車内で半目になりながらウトウトしていた私が顔をあげたその先に、見覚えのあるあの『山の学校』の校舎が見えてきた。「来たんだ…山の学校に…」夢じゃない、これは現実。実感するまでほんのしばらく時間がかかった。

学校に着いて、校長や先生と職員室であいさつ。小さな職員室には窓が2か所、開いたドアを併せると3か所から光が入り、自然光でも明るい。長倉代表は次々に教室のドアを開け、生徒たちに到着のあいさつをしまわる。全学年分教室が足りず、1年生と2年生はコンテナ、3年生はテントを仮の教室にして勉強していることは知っていた。だけど、教室をあてがわれた他の学年の教室もコンテナより小さく狭い。日中の明かりは教室のいちばん後ろに1か所ある窓から入る光のみで、薄暗い。そんななかでも一生懸命自分のノートに先生の板書を書き写す子どもたち。休み時間はやんちゃをしている男の子たちも授業中は神妙な面持ち。そんな姿になおさら愛おしさを感じてしまう。学校に行けることの幸せなど日本で実感する機会はなかなかない私たちだけれども、ポーランドの子どもたちは家畜の世話や家の手伝いからしばし解放され、純粋に「子ども」としていられるこの学校での時間を大切に過ごしているのだと感じられた。

◎ポーランド

自然が美しく、そのまま残っている。ということは、裏を返せば住環境は本当に厳しいと言える。ポーランド小・中学校に通う子どもたちが暮らす集落は、学校の下の方の集落も、学校より先のさらに高いところに位置する集落も、山肌へばりつくように家々が建てられている。爆撃や雪崩によって崩れ、朽ちかけた家と建て直した新しい家が並んで建っているところもある。ある生徒の家では空爆によって落ちてきた爆弾(不発弾?)を家の柱代わりに使っていた。水汲み用の桶の代わりにUSAとロゴの入った植物油の空き缶を使う様子も見られた。ここに暮らす人たちは、建築や補修のための資材がすぐに手に入る環境にはないため、代用できるものを上手に見つけ、使っているようだ。この前向きさ、臨機応変さがあればこそ、決して優しくはないこの地に生き続けることが出来るのだろう。たくましい。

〒187-0032 東京都小平市小川町 1-1071-15 比留川 気付
FAX & 留守番電話: 042-345-7805 E-mail: info_yamanogakkoo@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanogakkoo
郵便振替口座: 00160-1-667404
編集 ● 大野みか 岩崎 崇 大守 裕 佐々木 真紀 水間真紀
題字 ● 近藤理恵 デザイン ● 浅井充志 印刷 ● (株) アドタック

アフガニスタンの学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会った、パンシール渓谷ポーランド村の子どものための教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年2月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたり活動を続けていきます。

事務局から

- 2012年度分割会費納入の払込用紙を同封させていただきました。会費残額は封筒宛名ラベル下段の数字で表示してありますので、ご確認の上指定期日までに納入をお願いいたします。なお、会費残額を一括納入されてもかまいません。
- JVC(日本国際ボランティアセンター)国際協力カレンダー2012の「いのちの輝き」をご購入いただきありがとうございます。今度も収益の一部(8万1800円)が協賛金として本会に還元されました。なお、同カレンダー2013年版は長倉代表撮影の写真です。どうぞご期待ください。カレンダーのチラシは次回会報に同封する予定です。
- 不要切手、書き損じはがきのご提供ありがとうございます。今回も会報送料の半分以上をご提供いただいた切手で賄い、大変助かっております。引き続きご協力をどうぞよろしくお願いいたします。
- 住所変更の場合はお手数ですが事務局にご連絡をお願いいたします。
- 日頃のご支援に感謝を込めてポストカードを2枚同封させていただきます。なお、ポストカード(第2集・第6集)はまだ在庫がありますのでご購入いただけましたら幸いです。

ポーランドの小さな仲間たち

 <p>ムルサルちゃん 6歳</p>	 <p>アフマッドツアくん 6歳</p>
 <p>ラムズィアちゃん 6歳</p>	 <p>ムルタゾフくん 6歳</p>